

サ

11/1

毎月第一・第三木曜日発売

定価 350円

ラ

SUPER
PREMIUM
MAGAZINE
SERAI

イ

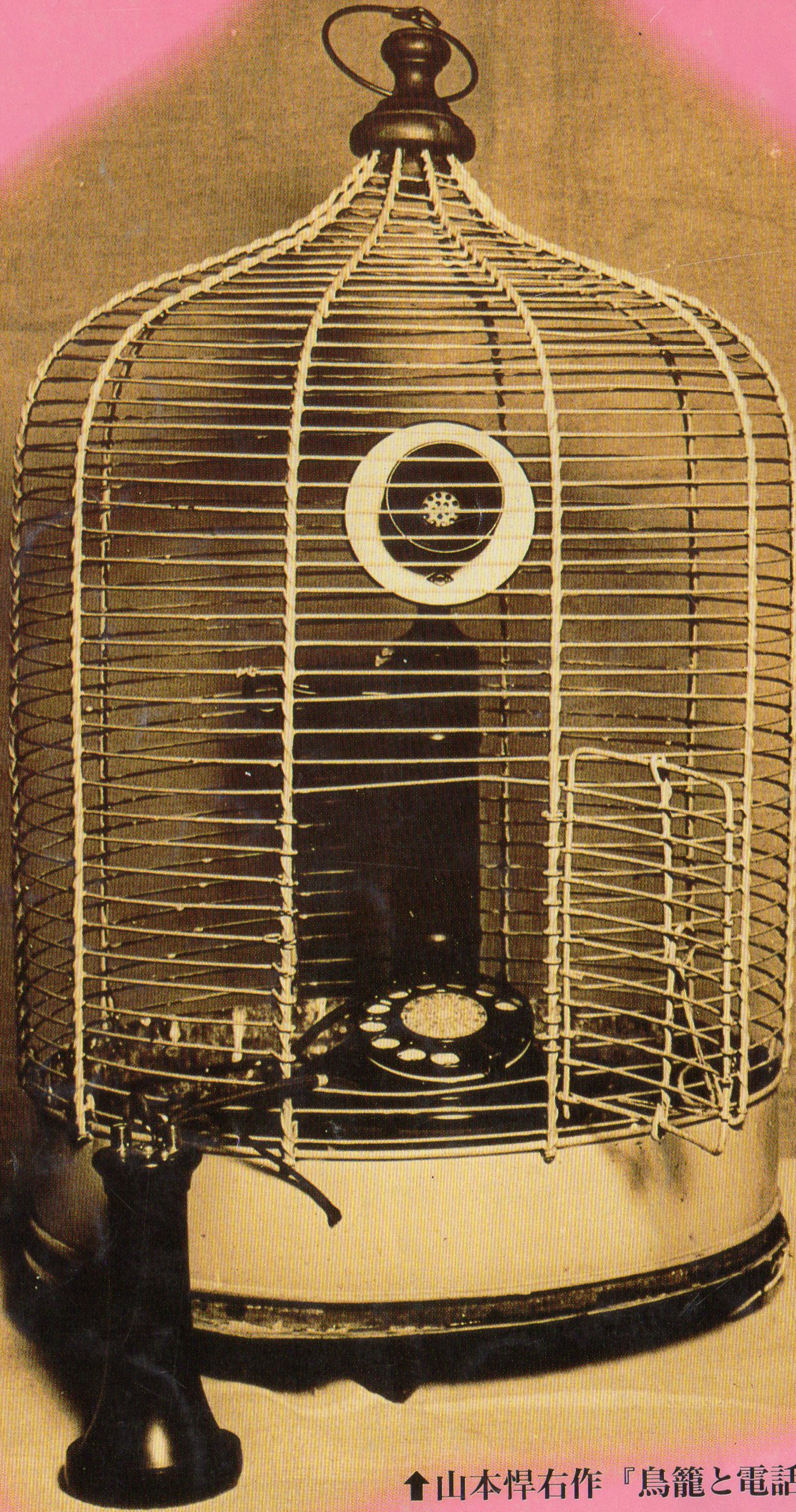
●インタビュー
●評論家

古波蔵保好

「正統派の吉田茂、
着くずし派の吉田健二、
ダンディーな日本人は
この父子に尽きます」

●モノ語り / 吉野の「竹林院群芳園」、箱根の「松坂屋本店」
下関の「春帆楼」ほか
歴史の舞台と
なった

有名旅館



↑山本悍右作『鳥籠と電話器』

●NHKジョイント企画 / 日曜美術館

日本のシュールレアリスム展

昭和初期、若きエネルギーを燃焼させた400人の超現実主義者たち

●特集

絶滅寸前カタログ

籐製乳母車、蚊帳、地下足袋、ベীগマ etc...

今、保護しないと
手に入らなくなる
逸品たち

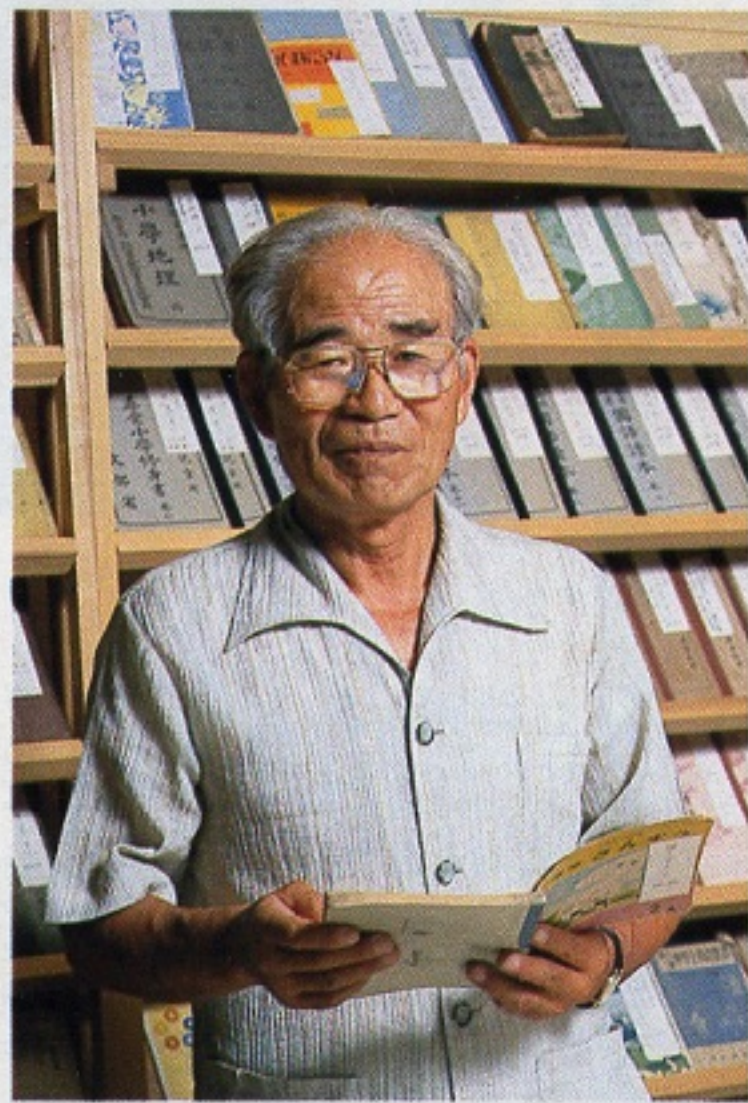
「絶滅」を未来に遺す

絶滅の危機に瀕し、その姿を消し去ろうとしている品々に、そっと救いの手を差し伸べる好々爺がいる。千葉県房総半島のど真ん中、ぐるりを山々に囲まれた、僅か100戸余りの静かな山村にその館はある。その名を『相川資料館』という。館長は相川千代治さん、66歳。元中学校校長だった相川さんは退職金を投じて個人資料館を造った。

館内には明治、大正、昭和に使われていた生活用品、玩具、農具、教科書などを約1万点も展示。この館を団体に訪れた老人クラブのあるメンバーは、なつかしきで胸が熱くなり、若い頃に習ったという漢字の本を取り、大声で読んで聞かせた。またある旅行者は「よくぞ、今まで守っていてくださった」と感嘆し、さっそく自宅にあった花籠を寄贈したという。ここでは寄贈品歓迎なので、展示品に寄贈者の名前が添えてあるのも面白い。そもそも、相川さんがこうした資料館を造るに至ったのは、子供の頃

から物集めが好きで、それが高じてのこと。収集家としての一面は今年、とく夫人と出掛けたフルムーン旅行のアルバムからも窺える。

旅行中のスナップ写真と一緒に、割り箸の袋、ホテルのパンフレット、マッチ箱、絵ハガキ、弁当箱の包み紙まで、本来なら捨ててしまいたいような物も貴重品として収集する。「物にまつわる思い出には文章がないものがありますからね。知らないうちに集めてしまっているんです」そんなふうにと捨てずにとっておいた物、骨董屋で買った物、近所から貰った物など、いつの間にか押し入れにも天井裏にも収納しきれないほ



相川千代治さんは昭和59年、地元の小櫃中学校校長を最後に40数年の教員生活に別れを告げ、昭和60年12月、資料館を設立、66歳。

房総半島の最深部に 絶滅と闘う館を発見

千葉県に発見した個人資料館に生活の未来を探る

どになった。そこで、昭和60年12月「物置を建てるようなつもりで」木造2階建ての資料館を自宅の敷地に完成。以来、幼児から最高齢は92歳の老人まで、来館者は絶えない。

生活とともに歩む資料館

「現在のように漠然とではなく、テーマをもっと絞ってはどうかと言う人もいます。が、私はテーマのないのが特徴だと思っています」その言葉通り、館内はいろんなものが混然一体、まさしく生活資料館。ある時、ワニの剥製を寄贈したいという人がいて、博物館に申し込ん

だところ、「館の性格と合わない」と断られ、ここで安息の地を得た。来館者は、館内のすべての陳列品に手を触れることができる。この点も、ガラスケースに入れて「さわるな」と貼り紙してある一般の博物館とは全く性格が異なる。そのうえ、貸し出しもOKで、先頃も文化祭用にと、地元の中、高校に数十点ずつ、それぞれ貸し出した。

集めた「がらくた」を相川さんは『我楽多』と書く。そのココロは『我楽しみ多し』。相川さんの『我楽多』集めはとどまるどころを知らない。

↓都会的な「ミュージアム」の外観と比べると、一見、ここは本当に資料館なのかと目を疑う。大八車、ポンプなどが剥き出しになっている。



太平洋戦争末期になると物資が不足し、ブリキの代わりに瀬戸物の湯タンポが出回った。ブリキ同様、保温のため波形がはいる。



↑印画紙を天日で感光させる日光写真の原版。使い捨てカメラのない時代、掌や木の葉などを原版がわりにしたこともある。



昭和初期のぜんまい式蓄音機。館内ではナツメロ、国民学校の模範朗読などの78回転レコード、100余枚が自由に聴ける。



少年達の遊びの中心がメロンコだった時代がある。長友柳太郎、川上哲治などスターの絵柄が人気だった。



丸刈りには不可欠だった手動バリカン。切れ味の悪いので刈るとちよびり痛かった。今は電動バリカンが主流となっている。



瀬戸物の人形。戦前、戦中の子供達は「鉄砲かついだ兵隊さん♪」と歌いながら、乃木大将、東郷元帥、航空将校の人形で遊んだ。



←資料館2階フロア。自由に手に取って見ることが出来る。使い捨ての時代の今日、身の回りから消えた道具類を再発見できる。

かつて、これらの民具は日本の生活そのものだった



↑戦中、戦後に家庭で使われた菓子製造用具。センペイ焼、ビスケット焼、カルメ焼、キンツバ焼など。今ではほとんど見かけない。



↑祭りになると、そわそわして早く駆けつけたくなったものだ。露店商は必ずブリキのおもちゃを並べて迎えてくれた。



↑これらペーゴマの刻印の中には、すでに絶滅したのものも多い。名前はすべからく「強そう」なもの。ブームになると学校で禁止された。



↑週刊誌の創刊号。相川資料館には雑誌の創刊号のコレクションもある。相川さんが知り合いから譲ってもらったもの。



➡右は輪ゴム、下の2点は短く切った竹を発射する鉄砲。左側は巻玉火薬と呼ばれ、専用のブリキ銃にて、大音響と火花を発する。

相川資料館
TEL. 0439-39-2352
入館無料
・生活民具及び玩具貨幣他・

救いの館はここにある

→国道410号線沿いのこの看板が目じるし。

東京駅からJR内房線特急で木更津駅まで1時間、JR久留里線に乗り換えさらに1時間、終点上総亀山駅で下車して車で5分。資料館は木造2階建て。1階には昭和9年製の冷蔵庫、東海道五十三次絵図、明治時代からの教科書など。2階には既に姿を消した家庭用品、農具などを中心に展示。相川千代治さんの個人資料館なので電話をしてから来館のこと。

千葉県君津市笹962。☎0439・39・2352。入館無料。